論文

近代ドイツにおける形態論争とその建築思想に関する研究

――1920年代のドイツでみられる屋根論争について――

竹　本　　真

TAKEMOTO Makoto

非文字資料研究センター2021年度奨励研究採択者

神戸大学大学院工学研究科　博士後期課程

【要旨】 本稿では、1920年代のドイツにおいて「陸屋根」の是非が論じられた「屋根論争」に着目し、陸屋根派、そして勾配屋根派を代表する19世紀末から20世紀初頭のドイツ人建築家、民族主義者、政治家、思想家であったパウル・シュルツェ＝ナウムブルク［Paul Schultze＝Naumburg：1869-1949］の主張や具体的な提案を比較しその論点を明らかにすると同時に、背景となる状況と照らし合わせることで論争の展開を考察した。1933年のナチス政権獲得とともに収束していく要因をみることで、近代建築運動の潮流を探ることを試みた。

A study on modern morphological controversy and its architectural ideas:
About the roof controversy in Germany in the 1920s

Abstract：This paper focuses on the “roofing controversy” in Germany in the 1920s, where the pros and cons of “flat roofs” were discussed. By comparing the claims and concrete proposals of Paul Schultze-Naumburg［1869-1949］, who was a politician and thinker, to clarify the points of discussion and at the same time to compare them with the background situation. We considered the development of the controversy. I tried to explore the trend of the modern architecture movement by looking at the factors that converged with the acquisition of the Nazi government in 1933.

はじめに

本研究は、近代ドイツで当時最も影響力をもっていた「ナショナリスト」とされる、ドイツ人建築家パウル・シュルツェ＝ナウムブルク【Paul Schultze＝Naumburg：1869-1949】（以下、ナウムブルク）に注目し、これまで着目されてこなかったナショナリズムの観点よりモダニズム建築を考察する。国内外問わず、彼についての建築史的研究はごくわずかであり、彼の活動の全体像や主張の詳細な分析はなされておらず、未だ不明瞭な点が多い。(1)

1869年にザクセン＝アンハルト州ナウムブルクで生まれたナウムブルクは、19世紀末までは建築家ではなく風景画家として名を馳せていた。その後、ミュンヘン分離派、ベルリン分離派を経て、彼の芸術理論及び建築思想は、風景画と退廃芸術論から建築の実践と批評に至るまで多岐にわたっており、建築思想においては1901年から1917年にわたって出版された『Kulturarbeiten［文化研究］』

により、ドイツの近代建築の主要な批評家となったとされる。その後、1904年にドイツ郷土連盟保護連盟の初代会長となり、当時普及し始めていたモダニズム的傾向に対し、伝統的な民家にみられる傾斜屋根を推奨していくなど、当時のドイツにおいて保守的な活動を展開していくこととなる。1930年には、ナチス・ドイツに入党し、彼の活動・思想はナチスに吸収され利用されていくこととなる。

特に後期の彼の人種差別的な活動・執筆により、戦後ドイツの歴史学において彼の追放が促された。彼の活動および思想はドイツにおける近代建築の発展に多大な影響を与えたにもかかわらず、今日ではナチスと結びついた『Kunst und Rasse［芸術と人種］』(2)（1928）以降の人種差別的な活動をもとに、伝統回帰を求める過激なナショナリストとして位置付けられている。また、20世紀後半には再評価を試みた研究(3)がみられるものの、それらの多くは人種差別的な活動が主であり、彼の建築思想を扱った研究とは言い難い(4)。

改めて、ここで近代ドイツおよびモダニズム建築に関する研究に目を向けてみる。今日における近代ドイツでのモダニズム建築の形成過程に関連した研究では、自然や地域性、ナショナリズムは着目されていない。『Architecture and Politics in Germany 1918-1945』(5)といった、近代ドイツ建築の通史的な研究でさえも、一般的な「モダニスト」によるモダニズム建築の形成過程といった視点に立ったものであると考えられる。本研究では、彼の建築思想の分析より、ヴァイマール期（1919-1933）のドイツを取り巻く建築市場との比較を行う。

近代ドイツ建築市場では、ドイツ工作連盟［Deutscher Werkbund］（以下、D.W.B）を中心に建築の改革が起きていたことはよく知られている。しかしながら、ドイツ工作連盟内で一般的に「モダニスト」、「ナショナリスト」と称される建築家らが共存していたことは上記の研究を含めて着目されていない。後の「CIAM」に参加した「モダニスト」と称されるヴァルター・グロピウス【Walter Gropius：1883-1969】、そしてナウムブルクさえも第一次世界大戦前からドイツ工作連盟に所属しており、両派は互いにドイツ国内での建築の改革を目指していたことが推測できる。

また、19世紀末から20世紀初頭の近代ドイツでは、建築の様々な議論が存在しており、それは当時の建築雑誌等で多くみられる(6)。そこには、グロピウスを始め「モダニスト」と称される建築家たちも多く寄稿している。しかしながら、様々な議論の見解は、「モダニスト」でさえも、その主張が交錯するなど、一般的な「モダニスト」といった枠組みでは扱いきれない問題と考えられる。

インターナショナリティとナショナリズムを対立的に捉えるのではなく、後者のなかにこそ前者的な意味を積極的に発見するといった視点が重要である。ここにおいて、ヴァナキュラーなものを拒否するモダニズムの原則を貫きつつ、1930年代に至ってスタイル化していく「モダニズム」の停滞を超克する新たな位相に突入していたことは、近代建築史において注目すべき事象だといってよい。

ナウムブルクは上記の様々な議論にも関与している。なかでも、陸屋根の使用の是非が問われた「屋根論争」(7)にはいくつかの論考を寄せているものの、その論考に関しては着目されていない。そこで、本研究では「屋根論争」の展開を整理することでモダニズム建築の形成過程への影響関係を明らかにすることを目的とする。近代ドイツのモダニズム建築の再考より、近代ドイツ建築について新たな視座をもたらすことを目指す。

Ⅰ　研究概要

(1)　研究目的

19 世紀末から 20 世紀初頭のドイツでは、モダニズム建築の形成過程において、モダニストとナショナリストによる対立関係が存在している。モダニズム建築の形成過程に関連する研究は、常に「モダニストによるモダニズム建築の形成過程」といった視点に立ったものと考えられる。しかしながら、「モダニスト派[8]」「ナショナリスト派[9]」といった両派は互いの主張を反動とし、それぞれの優位性を主張しており、モダニズム建築は両派の相乗効果の高まりによって形成されていったと捉えることもできる。そこで、本研究では両派の相乗効果の高まりが近代ドイツのモダニズム建築の形成の一助になったという観点より、双方の間で「陸屋根」の使用の是非が問われた「屋根論争」の動向を明らかにすることを目的とする。ドイツにおいて 18 世紀中頃以降陸屋根の実用性が波及していく過程より、こういった流れは 1871 年の普仏戦争以降、近代国家形成の中で国家的なナショナリズムと関係して再熱していくわけであるが、本研究では 19 世紀末から 20 世紀初頭のドイツ及びヨーロッパの政治背景並びに建築家の動向と主張を中心に、彼らが各主張を優位とする根拠とそれがその後にどのように展開されていったのかを整理していく。

(2)　既往研究

「屋根論争」の過程についてはバーバラ・ミラー・レーンやノルベルト・ボルマンらが取り扱っている[10]が、これらは屋根論争を断片的に取り扱った研究といえ、陸屋根を冠するモダニズム建築の成立過程における一事象として扱っている。また、論争の内容を具体的に扱ったものとして、中江研・山本一貴「W. グロピウスと P. シュルツェ＝ナウムブルクとの屋根論争について[11]」が挙げられるが、ここではグロピウスが 1925 年 5 月に『Bauwelt』誌に寄せた陸屋根に関する論文[12]とナウムブルクの著作『Flaches oder geneigtes Dach?［陸屋根か勾配屋根か？[13]］』(1927)、『ABC des Bauens［建築の ABC[14]］』(1928) での主張に注目したものであり、彼の建築思想を全て補っているとは言い難く、誌面上での「屋根論争」を単なる対立概念として扱っているにすぎない。また、ナウムブルクについては建築史家のユリウス・ポーゼナーの『Paul Schultze＝Naumburg Maler Publizist Architekt 1869-1949[15]』によってドイツでナウムブルクの学術的再評価がみられドイツの芸術と建築史を再紹介した。本研究ではこれらの先行研究を踏まえて考察を進めたい。

Ⅱ　19 世紀末の生活改革運動としてのドイツ郷土保護運動

(1)　19 世紀末のドイツでの生活改革運動について

アメリカから新たに伝わった陸屋根の技術的側面はドイツにおける市民層に定着したわけでなく、一部の近代建築家による革新的な動向と考えられる。ドイツではむしろ 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ドイツのみならずヨーロッパ全体で近代化によって引き起こされた疎外感と均質化に対抗するために、特定の地域的及び文化的特徴を主張したいという民族の統一を求める欲求の動向がみられる。ドイツでは世紀末において普仏戦争後（1871 年）のドイツ帝国統一以降工業化とともに、都市

の急激な変化が進む。都市に住む多くの人々は農村出身者であり20世紀になるとまず自然保護運動が起こり、自然破壊への警笛が鳴らされ始める。[16] これは19世紀初頭からのドイツのナショナリズムの動きもあって、20世紀に入り自然主義的・ロマン主義的な傾向を帯びた都市を作り出すきっかけとなった。こうした運動こそ生活改革運動と呼ばれるものであった。[17]

(2) ドイツ郷土保護運動・連盟について

前述のドイツ全土に巻き起こった生活改革運動の中に、郷土保護運動もみられる。郷土保護運動は都市の工業化に対しての批判であり、ドイツ農村福祉及び郷土育成協会の活動、民芸運動、生活改善と強く結びついた田園都市運動などが含まれる。[18] これらは、大都市化するドイツの都市への抵抗運動であり、大都市批判が根底に存在していた。[19] そして、農村のロマンチシズムと政治的なナショナリズムによる保守的な思想とが、不可分に結びついていたとされる。[20] 大都市化により自然風景地が破壊されていく現状を打破すべく、音楽家・芸術家であったエルンスト・ルドルフ【Erunst Rudorf：1840-1916】は、天然記念物保護とランドスケープ保護を目的に、[21] さらに「自然保護」を主張した。その後、「自然保護」と「文化財保護」を目指し、1897年に「郷土保護」という考え方を提示した。[22]

1880年、彼のエッセイ「現代生活と自然との関係について」が出版され、工業化による景観の荒廃について記された。この著書に共鳴したパウル・シュルツェ＝ナウムブルクらが準備に参画し、1904年ドレスデンで「ドイツ郷土保護連盟」[Deutscher Bund Heimatschutz]（以下、D.B.H）が設立される。この連盟の初代会長にはナウムブルクが就任し、設立当初の規約には、以下のような活動目的が記されている。

> 「連盟の目的はドイツの郷土をその自然的・歴史的に形成された独自性において保護することである。連盟の作業領域は次のグループに分かれている。a）文化財保護、b）伝統的な農村の民衆的建築様式の保護、c）廃墟も含む地域景観の保護、d）地域固有の動植物界や地理的特色の保護、e）動くものの分野での民衆芸能、f）慣習、風習、祭礼、衣装」[23]

ルドルフはナウムブルクの著書『Kulturarbeiten Band. 1 Hausbau［文化研究（1）家の建設］』[24]（以下、『文化研究（1）』）を知るようになった後、ナウムブルクに目を向けた。そして、彼のために協力を提案した。『文化研究』の成功は、ナウムブルクを単なる建築家の一人にしただけでなく、国土安全保障のアイデアを促進したのであった。

1904年に設立されたD.B.Hは、郷土保護とは、自然だけでなく自然を保護したいという野心、伝統的な芸術品や工芸品、そして地域の建築の伝統、景観への美的関心と生態学的関心といった自然・工芸・建築・風景・風習など人間生活を取り巻く全てを対象とし、それらが近代的な発展によって消失していくことへの抗議や救済を目的としていた。

この新しい組織は、人事と組織の面で教育改革運動とその協会や協会の分野全体とネットワーク化された。連盟の仕事分野は、広範にわたっていた。記念碑の保存、伝統的な農村部やブルジョアの建設方法の維持、既存の在庫の保存、遺跡を含む風景の保護、在来動植物の救助、地質学的特殊性、移動可能な文化財から習慣、祭り、衣装への民俗芸術の保存と促進などが含まれていた。

ルドルフにおける故郷（Heimat）とは、ドイツの民族性の源泉であり、そこには建造物等の文化遺産だけではなく自然の景観も含まれる。自然景観を「民族の精神的共有物」であるとし、故郷のアイデンティティを育むための基盤としていたと考えられる。ルドルフが提唱した「郷土保護」という言葉は、当時の愛国主義やナショナリズムが拍車をかけ、多くの文化人に支持された。ルドルフとナウムブルクは1902年または1903年に最初に会ったとされ[25]、ジャーナル『Heimatleben［家庭生活］』において、

「私は文化的作品の最初の巻を出版しました。そしてルドルフはそれらを読んでいました。彼は私に非常に暖かく誠実に手紙を書き、彼は完全な同意を表明しました。私たちは手紙のやり取りですぐにとてもフレンドリーになりました。ワイマールへの旅行で、彼はザーレックで私を訪ねました。そしてすぐに私たちの契約が結ばれました[26]。」

と述べており、二人の友好関係がうかがえる。また、桂修治著「創始期の郷土保護論　エルンスト・ルードルフにおける「郷土保護」の立場[27]」では、「この連盟の初代会長には、ルドルフの後継者の一人であったナウムブルクが就任している[28]。」とされ、その関係性はより強固なものであったと考えられる。

19世紀、プロシアでは政治的な目的を持つ団体は禁止されていたが、多数の団体が存在し、郷土保護連盟は当時のプロシアを中心としたドイツ帝国において一定の政治的影響を持ち得たと考えられる。「郷土保護」の中に取り上げられたものに、ライン川の水力発電所建設に対する反対意見の表明がある。論文執筆時に建設計画の途上であったものに対し、1904〜06年にかけて、環境保護のための集団抗議運動に向けて新聞や議員を通じた呼びかけを行った。結果的に計画を阻止することはできなかったが、このことが郷土保護を国の政治的課題の一つとして承認させるに至ったと考えられる。実際、プロシア政府のもとではD.B.Hの圧力により「村落及び風光明媚な地域の外観の醜悪化に対する法律[29]」が可決される。これにより地方自治体は外観規制を行う通りや広場、また建築物を具体的に特定できるようになった。D.B.Hの設立によって、これまで各地で同じような動きをしていた団体がその傘下に収まることで、政治的影響力をも兼ね備えた巨大な組織へとなったとされ、郷土と伝統を備えた景観を維持することが同法律の目指していたものであり、影響はドイツ帝国中に波及したとされる。

Ⅲ　ナショナリストとモダニストの屋根論争

(1)「陸屋根」のヨーロッパへの波及

16世紀以降のヨーロッパにおけるルネサンスや18世紀の新古典主義といった回帰的視座より展開された陸屋根の使用の是非は、ヨーロッパの技術論を背景に高まりをみせていた[30]。そして、普仏戦争以降19世紀後半、大規模な陸屋根の使用の是非を主導したのはアメリカ、主にシカゴであった。1871年の大火によって壊滅的な被害を受けたシカゴでは、同時にシカゴ再開発の契機となった中で、市は木造住宅を禁止したことでレンガ、石炭、鉄を推奨したことで多くの建築家により高層建築

物の建設ラッシュが始まるわけであるが、鋼や木材の支持構造を備えた傾斜屋根と比較して火災のリスクが少ないことから陸屋根の使用が推奨されていた。[31] また、防水材として開発された瀝青（れきせい）を使用したアスファルト・ルーフィング[32]が19世紀半ばにはアメリカで入手可能であったことも陸屋根が支持された一因とされる。当時、シカゴで活躍していた建築家であるフランク・ロイド・ライト［Frank Lloyd Wright：1867-1959］は都市だけではなくキャンティレバーや鉄筋コンクリートスラブを駆使した作品を郊外の住宅で手掛けるなどシカゴ学派のアイデアを郊外に展開させていた。そんな中、1901年にシカゴで開催された「Lextington Terrace Apartments project」で「Lexington Terrace」を設計した。全体が陸屋根で明確に構造化されたブロックであるこの作品は、中央の中庭の周りに階段上のテラスが配置されていた。そして、1910年にはベルリンで出版された『Ausgeführte Bauten und Entwürfe von Frank Lloyd Wright［フランク・ロイド・ライト建築図面集[33]］』によって彼のデザインはヨーロッパに影響を与えていく。第一次世界大戦後のデ・ステイルからグロピウスやミース・ファンデル・ローエ［Ludwig Mies van der Rohe：1886-1969］（以下、ミース）までヨーロッパ近代芸術家やそのグループに多大な影響を与え、陸屋根の使用を促したとされる。

(2) 郷土保護主義者パウル・シュルツェ＝ナウムブルク

19世紀末から20世紀初頭において陸屋根といった形態に単なる形態以上の政治的対立とし扱われるようになることがうかがえる。生活改革運動を背景に自然保護を唱えるD.B.Hの設立以降、それ以来啓蒙活動が展開され10年後にはドイツ全土に関連する委員会や連盟が組織された。[34] この連盟の表向きの目的は「ドイツの郷土をその自然かつ歴史的発展の独自性において保護すること」であったが、本来の目的は「ドイツの民族性を衰弱と墜落から保護する」といったより民族的な意味合いを持つものであり、ナウムブルクは特に民家や村や古城の景観の保護に尽力したとされる。また、風景を守るためには建築の工法や外観を規則することが必要と説き、特に工業製品の建材を用いることを強く拒み、伝統的素材の使用にこだわったとされる。[35] やがて、保護育成の対象は郷土の空間の構成するモノから郷土を担うヒト（Volks）へと移行し、民族の育成へと転換される。[36]

当時ナウムブルクは建築家・建築評論家としてドイツで名を馳せており、伝統性を重視し18-19世紀初頭への回帰を訴える建築観を主張していた。こういった郷土保護主義者の主張はナウムブルクの1901年『文化研究（1）』に代表されるように、荒廃したドイツの景観への危機感、工業化の悪影響、新建築材料と工法による風景損失、資本主義に対する批判により、19世紀初頭の伝統的な住宅を理想とし、住宅モデルとしてふさわしいものと考えていた。特に、伝統的な形態として屋根形状を挙げ、急勾配の切妻屋根を重要な要素とし、陸屋根を新しい形態として否定している。切妻屋根は雨を防ぐ技術的側面だけでなく、親しみやすさといった心理的側面からも重視していた。伝統的な形態を最重要視しながら、技術的側面と心理的側面との組み合わせによる形態こそが、「ドイツ的」であると評価した。[37]

ここでの著書は18-19世紀初頭への回帰を訴えたものであり、それは同時代の一つのトレンドとなっていたことが伺える。19世紀初頭の建築としてビーダー・マイヤー様式への回帰を訴えたパウル・メーベス［Paul Mebes：1872-1938[38]］の『Um 1800［1800年頃］』（1908[39]）や、建築理論家フリードリヒ・オステンドルフ［Friedrich Ostendorf[40]］の「Sechs Bücher vom Bauen［建築に関する六

書]」(1914-1920)[41] でのビーダー・マイヤーへの回帰といった主張など第一次世界大戦前までには1800年頃からの建築との再接続を求めた動きが存在していたことが考えられる。それは後にモダニストとして広く扱われるミースの「リール・ハウス〈Haus Riehl〉」(1906-1907)からもうかがえるように多くの建築家がこの再接続を求めた回帰的傾向に影響され、その先駆けとなったのが『文化研究(1)』であった。

(3) 第一次世界大戦以前の屋根論争

一方、こういったナウムブルクを代表する郷土保護主義者に対してライトの影響を受けながらモダニストたちは陸屋根の使用を主張していく。ウィーンのオットー・ワーグナー[Otto Wagner:1841-1918][42]やD.W.Bの創設者の一人であるフリードリヒ・ナウマン[Friedrich Nauman:1860-1919][43]らは、1896年に美しい水平性やシンプルさといった美的観点ならびに木製セメントを鉄に変わる工業材料として挙げ、陸屋根の優位性を主張していく[44]。

こういった動きは第一次世界対戦後の新しい政治的社会構造を反映させるための新しい建築が求められる時代であったドイツでは、新たな建築アイデアを実験する土壌として肥沃であった。

設計競技では急勾配な屋根に加えて、陸屋根が景観と経済的理由より満足のいく効果を得られるかどうかが目的であった。設計は郊外の別荘、農場の建物、労働者の住居コロニーなどであった。審査員にはフリードリヒ・シーゼルベルグ[Friedrich Seeßelberg:1861-1956][45]やテオドール・ゲック[Theodor Goecke:1850-1919][46]、また過激な郷土保護連盟員であったとされるエミール・ホッグ[Emil Högg:1867-1954][47]といった郷土保護主義者からベルリンの駅舎建築家で知られるアルフレッド・グレナンダー[Alfred Grenander:1863-1931][48]そしてペーター・ベーレンス[Peter Behrens:1868-1940][49]がおり、D.B.HとD.W.B両派閥が混在していた。そして両派に受け入れられるようなデザインの模索がされていた。実際、設計競技の条件として10度以上30度以下の屋根勾配が制約されており[50]、両派の妥協案であることがうかがえる。しかしながら、ここでの設計競技は、美的観点だけでなく経済的な問題としてもD.B.HとD.W.Bの間の公な場での断絶を促したとされる。

D.W.Bは陸屋根に利用されていたアスファルトルーフィング製造業者から多額の金銭を授受していたとされ、D.B.Hから非難された[51]。D.W.Bは遅ればせながら授受を認めたものの、改めて否定するなど泥沼化し、第一次世界大戦を経た戦後ドイツの産業としての屋根は、陸屋根といった屋根の造形を超えた二つの改革グループの間に深い溝を作ったとされる。

Ⅳ 第一次世界大戦後の「屋根論争」について

(1) 第一次世界大戦後の「屋根論争」

時を経て第一次世界大戦後「屋根論争」はさらに激しくドイツ建築市場にみられることとなる。1922年、表現主義の勢いが減退してくるとその反動としてこの頃には新即物主義【Neue Sachlichkeit】が陸屋根を主張していく。1919年にワイマールに建設されたバウハウスの初代校長に就任したグロピウスは、1922年には同地区に住宅コロニーの建設を試みるなど、ドイツにおいて新しい形態としての陸屋根誕生の機運が高まっていた。しかしながら、ここでの住宅コロニー建設に対して、地

元当局から、陸屋根は景観として適したものではないと批判されるなど容易く受け入れられたものではなかった。[52] 1923年に同地区で開催された展覧会では実験的住宅「ハウス・アム・ホルン〈Das Haus am Horn〉」を建設した。同地区で展開されていくグロピウスを代表としたバウハウスの実験住宅は、この作品によって建築界に「陸屋根」の使用が、建築雑誌において陸屋根派の主張として現れ始める。

ワイマール時代の先駆的な建築雑誌であったとされる月刊誌『Uhu』1925年4月号では「Wer hat Recht? Traditionelle Baukunst oder Bauen in neuen Formen［誰が正しい？　伝統的な建築または新しい形の建物］」[53]と題して、グロピウスによる陸屋根の優位性とナウムブルクによる勾配屋根の優位性が記されている。グロピウスは、「Trocken Montagebau［トロッケン・モンタージュ・バウ（乾式組立構造）］」といった新しい工法や技術を用い、工場生産によって労働量を抑えながら天候や季節に左右されることなく生産できるものとして、時代に相応しい住居として陸屋根を主張している。一方、ナウムブルクはそういったグロピウスの主張に対して、第一次世界大戦によってドイツの風景は損失したとし、そこに陸屋根といった新しいものを促進していくことは現在までの「ドイツの顔」「ドイツの風景」と何ら関係がなくドイツ人の精神の分離につながるとしている。そうした中で、1925年5月にはグロピウスが陸屋根の構造ならびに使用法に関する論を『Die Bauwelt』誌に寄稿したことで大きな論争となる。[54]

(2)『Die Bauwelt（1925）』でのグロピウスらの陸屋根の主張（1925-26年）

グロピウスの論文は、陸屋根の構造ならびに使用法に関して「ドイツ国内外の建築家に対して陸屋根の技術的側面に関する5項目のアンケートを行い、それに基づいて1926年『Die Bauwelt』誌上に陸屋根の技術的正当性を主張した論考を寄せた。」とされ、「陸屋根が技術的に解決可能」ということを示したものであった。こうしたアンケートによって、「陸屋根」を主張する建築家たちの主張が雑誌上を覆ったことで屋根論争が過激化したとされる。グロピウスは冒頭で、「水平な陸屋根を備えた立方体の配置は、全ての国の最高の近代建築の多くのプロジェクトや建物で現代的なデザインとして認識されている」と陸屋根の存在意義を示している。そして、陸屋根の技術的正当性を主張した論考のアンケートの回答にはブルーノ・タウト［Bruno Julius Florian Taut：1880-1938］（以下、タウト）やペーター・ベーレンスといった、近代建築家が名を連ね、陸屋根を支持していた。[55] また、ル・コルビュジエ［Le Corbusier：1887-1965］は、陸屋根は降雨・降雪の多いドイツなどの北方の気候には適さないとして批判されることに対して「積雪時の合理性から『陸屋根』しかも建物の中央に雨どいを通す形こそが適切である。」[56]という主張を述べている。その理由として「屋根に積もったが建物の熱で溶けて流れ出す際、外壁側で排水する陸屋根の場合には外壁側の軒樋や縦樋では外気の影響で凍結して建物や樋を破損させる。」[57]とし、合理的な解決方法より陸屋根を主張した。また、勾配屋根の場合は「暖房がストーブのセントラルヒーティングになるとその小屋裏も暖められて外側排水の陸屋根と同様の状況が発生し、なおかつ凍結した部分では屋根瓦の内部に水が浸透し、雨漏りを生じさせる。」[58]と述べ、技術的観点からも陸屋根の優位性を主張していった。

図1　ヴァイセンホーフ・ジードルンク　ル・コルビュジエ（1927）

(3)　モダニストたちの「Weißenhof Siedlung（1927）」での陸屋根（1927年）

1925年の近代建築家たちの主張は1927年の住宅展「ヴァイセンホーフ・ジードルンク〈Weißenhof Siedlung〉」（以下、ヴァイセンホーフ）によって陸屋根はさらに盛り上がりをみせる（図1）。1907年設立のD.W.B主催のもと、シュトゥットガルト市の全面的資金提供を得て開催されたこの展覧会は「合理的な工法で新しい体験に富む新しい住まいへの展望」を大衆にプレゼンすることが計画の大要であった。ミースが全体計画を担う芸術監督に就任し、スイス、フランス、オーストリア、オランダ、ベルギーといったヨーロッパ各国から招いた前衛的建築家17名による、戸建て住宅、二戸建て、連棟住宅、中層集合住宅など21棟63戸のモデル住宅群が建設されている。インテリアはそれぞれ設計者とは異なる個別の建築家やデザイナー55人に依託された。

本展のヴァイセンホーフで出現した住宅は、大枠では、コンクリートとガラスを用いたフラットルーフ（陸屋根）の立方体、水平連続窓、装飾を廃したホワイトボックスの集合体である。後にインターナショナル・スタイルとされる造形であったことは、建築の新しい造形に、国際的普遍的な共通性が存在することを内外にアピールするものだった。[59] これまでの例はほとんどが計画にとどまっていたのに対して、ヴァイセンホーフの実現は近代建築史における重要性が想像できペーター・ベーレンス、グロピウス、ル・コルビュジエ、ミース、ハンス・シャロウン［Bernhard Hans Henry Scharoun：1893-1972］、J.J.P.アウト［Jacobus Johannes Pieter Oud：1890-1963］など、後に巨匠とされる建築家が同じプロジェクトに参画し、あらゆる点でその後の近代建築の動向に決定的な影響を与えた展覧会であったとされる。ミースが一つの要件として陸屋根を指定した際、建築家たちは様々な側面から陸屋根の優位性を主張していく。例えば、ペーター・ベーレンスは、テラスは結核患者の療養に使用できると述べ、[60] リヒャルト・デッカー［Richard Döcker：1894-1968］は「勾配屋根は平面の自由さを制約する」と述べている。[61] こういった主張は同年にエルンスト・マイ［Ernst May：1886-1970］（以下、マイ）によって『Das neue Frankfrut』誌で「陸屋根」についてヴァイセンホーフに参加した建築家たちによって特集が組まれこととなる。

しかしながら、ヴァイセンホーフのプロジェクトは速やかに市民に理解されたものではなかった。シュトゥットガルト市はヴァイセンホーフを市営住宅プログラムの一環として考えており、それによって市議会においても議論されることとなった。そこでは［ドイツ国家人民党：Deutschnationale

Volkspartei］[62]から非難されることとなった。市議会の代表者は「真の芸術は生きている国の遺産の土壌から成長する」[63]とし、陸屋根は地域の気候に適していないと批判した。一方、ヴァイセンホーフの支持者の多くは社会主義者であり労働者の住居を改善すると主張していく。ここでの論争は、それまで普遍的で地域的な象徴として建築表現の上で扱われていた陸屋根の是非が、国家の保守派と改革派の間の政治的な分裂の表れとしてドイツ上にみられたものであった。

(4)『Das flache dach（1927)』でのE・マイらの陸屋根の主張

時を同じく、1927年にマイによって『Das neue Frankfrut』誌で「陸屋根」特集が組まれる。1925年よりフランクフルト市で住宅計画の建築家として指名され、同市の建設局長として1925-1930年の間に1万2千戸の大規模なジードルンクの建設を主導していた。特集の冒頭では「戦前には構造的な細かな問題が建築において重要でないと解釈されていたとし、戦後の住宅不足が構造設計への関心を再熱させ、その最たるものが屋根形態である」と述べている[64]。そして、論争が顕在化した理由としてコンクリートの使用によって仕事を失った大工による主張といった経済的観点からの主張であり、「都市景観の調和の為に故郷を求め、回帰的に傾斜屋根を採用するといった美的観点からの主張は新しい時代に対応できておらず、ファサードが間取りを制約する時代は終わりだ」と述べている[65]。続けて、「郷土保護連盟が陸屋根が都市の調和を壊していると考えていることに対して、陸屋根は都市を荒廃させていたマンサード・傾斜屋根などに代わり、新しい統一をもたらす」としている。また、特集には「陸屋根と傾斜した屋根をめぐる論争に関する建築家協会「『Der Ring』による宣言：ERKLÄRUNG DER ARCHITEKTENVEREINIGUNG „DER RING" ZUM STREIT UM FLACHDACH UND STEILDACH」として建築家達の名が確認できる（表1)。

表1　Das neue Frankfurt：internationale Monatsschrift für die Probleme kultureller Neugestaltung――1926/1927（新しいフランクフルト：文化再編の問題に関する国際的な月刊――1926年/1927年）

年(Year)	月(Month)	執筆者(Writer)	タイトル(Title)	邦題(Japanese title)
1927	7	May, Ernst：エルンスト・マイ	Das flache Dach	陸屋根
		May, Ernst：エルンスト・マイ	ERKLÄRUNG DER ARCHITEKTENVEREINIGUNG„DER RING"ZUM STREIT UM FLACHDACH UND STEILDACH	陸屋根と勾配屋根をめぐる戦いに関する建築家協会「Der Ring」による宣言
		Westheim, Paul:ウェンストハイム・ポール	Zur Ästhetik des flachen Daches	陸屋根の美学について
		Bierhalter, Willi:ビールホルダー・ウィリ	Dichtungsmassen für Flachdächer	陸屋根のシーリングコンパウンド
		Le Corbusier：ル・コルビュジェ	DIE EROBERUNG DES FLACHEN DACHES	フラットルーフを征服する
		Döcker, Richard: リチャード・デッカー	Das flache Dach auf der Werkbund-Ausstellung	Werkbund展の平な屋根
		Haesler, Otto: オットー・ヘスラー	Zum flachen Dach	平な屋根へ
		Lurçat, André: リュルサ・アンドレ	Der Weg zur Terrasse	テラスへの道
		Kaufmann, E.: E・カウフマン	Das flache Dach in der Vorkriegszeit	戦前の平な屋根
		Neisser, Max: ネイサー・マックス	Das flache Dach vom Standpunkte der Hygiene	衛生状の観点からみた陸屋根
		Migge, Leberecht: ミゲ・レベレヒト	Das grüne Dach	屋上緑化
		Wright, Frank Lloyd: フランク・ロイド・ライト	Betonbau und flaches Dach	コンクリート構造と陸屋根
		Oud, Jacobus J. P.: J.J.Pアウト	Das flache Dach in Holland	オランダの陸屋根
		Trambauer, Fritz: フリッツ・トランバウアー	Das flache Dach im Industriebau	工業用建物の平な屋根
		Frank, Josef: フランク・ジョセフ	Das steile Dach ist ein Rest aus dem romantischen Zeitalter	急な屋根はロマンティックの時代の名残
		Schuster, Franz: Randbemerkungen: フランツ・シュスター	Das flache Dach	陸屋根
		Tessenow, Heinrich: ハインリヒ・テッセナウ	Das Dach	屋根
		Wichert, Fritz: ヴィヒャート・フリッツ	Architektonische Universalgestaltung und Heimatkunst	建築のユニバーサルデザインと地元の芸術

(5)　1927年以降のナウムブルクの著書での勾配屋根の主張

1913年にはD.B.Hを辞任していたナウムブルクは、1925年のグロピウスの論文での主張に対して1927年の『Flaches oder geneigtes Dach?［陸屋根か勾配屋根か？］』[66]の中で陸屋根を否定している。ここでは明らかにグロピウスに対抗する意図を持った5項目のアンケートとその結果が掲載されていた。著書では、降水の排出、低コストから「勾配屋根」を支持し、短寿命、漏水発生のリスク、ひどい外観といった点で「陸屋根」を否定している。また、ヴァイセンホーフは住宅展であったこと

に対して、公営住宅や展示会などの急務よりスケジュールと品質を担保することが難しいとも述べている。しかしながら、単なる造形批判ではないこともうかがえる。著書では「陸屋根は南部ヨーロッパやオリエントでのものであり、気候風土から考えてもドイツの景観に適するとは考えていない[67]」とも述べており、翌年に出版された『ABC des Bauens［建築の ABC］』でも、同様に否定しながら「長期に渡って雨や雪が降るドイツでは、ふさわしい形態ではない[68]」と気候風土をもとにドイツではふさわしい形態ではないと、陸屋根は降水の少ない南部ヨーロッパ（イタリア）でこその形態であり、気候風土を考えてドイツは勾配屋根がよいと主張している。

(6)「Der Block」設立

ヴァイセンホーフは、1927 年 7〜10 月の間に開催された。ミースのマスタープランによって、多くの「モダニスト」らが団結し開催に至るわけであるが、計画当初（1925 年頃）には、開催地シュトゥットガルトの建築家による全体計画が計画されていた。そして、後述の通り、ボナッツがドイツ工作連盟の委嘱で建築計画に当たっていた。しかしながら、勾配屋根をもった住棟計画がドイツ工作連盟内で批判され、ミースがマスタープランを担当したのであった。

1926 年 5 月 5 日の「Schwäbischer Merkur[69]」にボナッツによる、ミースへの批評記事が確認される。そこでは、冒頭に、「さまざまな水平の地形で、平らな屋根の建物が斜面の型破りな通路にそびえ立っており、シュトゥットガルトのアパートよりもエルサレムのボルシュタットを彷彿とさせます[70]。」と述べ、陸屋根を冠するミースのマスタープランを批判したのであった。

上記の批判をもとにボナッツ、そしてナウムブルクらは団結し、ナウムブルクを中心とした保守的な建築の動向は、1928 年にナウムブルクの故郷であるナウムブルク・ザーレックにおいて設立された建築家集団「Der Block」（以下、D. B）によって確立された。1918 年に住宅専門家としてシュトゥットガルトにて力を得たナウムブルクは、ドイツ国内のモダンムーブメントに対抗する形で 1928 年 6 月に D. B を設立した。ドイツ郷土保護同盟の会長をすでに辞任していたナウムブルクは、ドイツの伝統と価値観を守り永続させるために、伝統的な建築工法や材料を維持しバウハウスを始めとした近代的で機能的な建築を批判した。創設メンバーは以下の 8 名でありいずれも保守的な思想を持った建築家であったとされる（表 2）。

表 2　Der Block Members（Established in 1928）*『Deutsche Bauzeitung 1933 Jg. 67 No. 45』を中心に著者作成

人物(Members)	当時の役職(Job title at that time)
Paul Bonatz	Co-founder of the Architects Association DerBlock(Der Block共同創設者)
Paul Schmitthenner	Co-founder of the Architects Association DerBlock(Der Block共同創設者)
German Bestelmeyer	Professor, Technische University München(ミュンヘン工科大学教授)
Erich Blunck	Professor, Technical University of Berlin(ベルリン工科大学教授)
Albert Geßner	Associate Professor, Technical University of Berlin (ベルリン工科大学准教授)
Paul Schultze-Naumburg	Co-founder of the Architects Association DerBlock(Der Block共同創設者)
Franz Seeck	Member of the Prussian Academy of Arts(プロイセン芸術アカデミー会員)
Heinz Stoffregen	Co-founder of the Architects Association DerBlock(Der Block共同創設者)

V　1927年以降の「屋根論争」について

(1)　表現主義者らの「Fischtalgrund Siedlung（1927)」での陸屋根と勾配屋根

ここまで1927年までのシュトゥットガルト市のヴァイセンホーフを中心に引き起こった「屋根論争」をみてきた。しかしながら、こういった対立は特定の地域にかかわらずベルリンといったドイツを代表する大都市においてもみられる事となる。1926-1932年にベルリンのツェーレンドルフに当時ベルリン市の建築家であったタウトらによって「オンケル・トムズ・ヒュッテ〈Waldsiedlung Onkel Toms Hütte〉」住宅団地が建設された。これは森の団地と呼ばれており、森の中に建つ集合住宅群として1,100の集合住宅と800の戸建て住宅が設計された（全1,952戸)。

施工は労働組合系の住宅供給会社GEHAGによりに建設された。戸建ての住宅が箱型の連続住宅として配置されており、フーゴ・ヘーリング［Hugo Häring：1882-1958］やザルヴィスベルク［Otto Rudolf Salvisberg：1882-1940］やタウトといった、当時の「ノイエス・バウエン［Neues Bauen：新建築］」として台頭してきた陸屋根を採用したものと考えられる。

一方、オンケル・トムズ・ヒュッテの最初の建設段階が1928年に完了した後、そのすぐ横に約30軒の「フィッシュタール・ジードルンク〈Fischtalgrund Siedlung〉」が建設される。ここでは勾配屋根が採用されており、陸屋根をもつオンケル・トムズ・ヒュッテに対抗する意識的なデモンストレーションであった（図3)[71]。施工は官司のための建築組織であり勾配屋根が原則であったGAGFAHによるものであり、設計にはハインリッヒ・テセナウ［Heinrich Tessenow：1876-1950][72]、パウル・メーベス、パウル・シュミットヘンナー［Paul Schmitthenne：1884-1972］（以下、シュミットヘンナー）といった建築家たちが加わり、機運を高めていた「陸屋根」のムーブメントに逆行する形で「勾配屋根」が登場される。GEHAGのオンケル・トムズ・ヒュッテは四戸建て住宅と一戸建て長屋、およびいくつかの個別住宅で構成されているのに対して、GAGFAHの集落のフィッシュタール・ジードルンクは、主に自己完結型の戸建てであった。

図2 「Der Block」創設メンバー（1928）右から3番目がナウムブルク

(2)　Der Blockらの「Kochenhof Siedlung（1933)」での勾配屋根

1927年のヴァイセンホーフでの陸屋根によってドイツ国内外に問わず陸屋根の機運が高まることとなっていく。それは同時に左翼または共産主義的でリベラルな現代建築運動としての陸屋根と、右翼または国家主義的な勾配屋根といった政治的な意味も含んだものとなり、さらには人種的な意味合いを含んだものとしても解釈されていくこととなる。20世紀初頭にドイツ郷土保護連盟の会長として活動していたナウムブルクは1928年に『Kunst und Rasse［芸術と人種][73]］』を出版する。ここでは、現代美術は北方人種の退化と衰退の結果であると主張し、表現主義の芸術作品を身体的および精神的障害者または病気の人々の写真と組み合わせて、聴衆の連想を誘発することによりモダニズム自体が病気と欠陥の結果であることを証明しようとした。また著書では「建築は気候、素材、個人より

図3　フィッシュタール・ジードルンク外観写真（1927）

も人種によって決定される[74]」と述べ、続けて「新即物主義の家は本物のドイツの家のようにドイツの土壌から生まれたものではない[75]」、「大都市の遊牧民の要求に応えて、どこにでも移動できるタイプ[76]」、「砂漠の端や東洋（オリエント）に適したモデル[77]」と、より人種的な意味合いを含んだものとして陸屋根を否定していく。そして、「陸屋根はオリエントから来ておりユダヤ人はオリエントから来た[78]」と述べ、陸屋根＝オリエント＝ユダヤ人といった後のナチズムを想起させるような差別的な主張がみられる。実際、ここでのこの種の表現は、ナチス・ドイツによって採用され、1937年に同名の展示会のために数百万人が配布した展示ガイド「Entartete Kunst［退廃芸術］」に再び登場することとなる。

そういった人種主義をもとに活動していたナウムブルクを中心としたD.Bの最初の活動は、1933年にシュトゥットガルトのコッヘンホーフにおいて開催された住宅展「住宅建設とアパートのためのドイツの木材」で設計された「コッヘンホーフ・ジードルンク〈Kochehof Siedlung〉」（以下、コッヘンホーフ）であった。この住宅展は、1927年にシュトゥットガルトで開催された住宅展「建築と住居」に対抗する形で開催された。ヴァイセンホーフは当初地元のパウル・ボナッツ［Paul Bonatz：1877-1956］[79]が工作連盟の委嘱で建築計画に当たっていたが、勾配屋根をもった住棟を配置していたこの計画に批判が出て、ミースがとって代わってマスタープランを作り上げた。これに抗議したボナッツは連盟を脱退し、D.Bに加わったとされる[80]。実際ボナッツは1926年にはヴァイセンホーフを「エルサエレムの郊外」と揶揄し（図4）、ナウムブルクも1929年の著書『ドイツの家の顔［Das Gesicht des Deutschen Hauses］』（1929）[81]でも人種的な意味で東洋の村の写真をヴァイセンホーフの景色と並べて揶揄している。

図4　ヴァイセンホーフ・ジードルンク　アラブの村（1934）

(3)「コッヘンホーフ・ジードルンク」(1933)の詳細

1933年9月23日にシュトゥットガルト市、ドイツ木材協会、そしてD.Bによって、シュトゥットガルトのコッヘンホーフで、分譲住宅地展「住宅建設とアパートのためのドイツの木材」が開催された。当時、新建築材料として、鋼や鉄筋コンクリートが流行していたことへの危機感より、ドイツ木材協会は、ドイツ国内外に対して、木材による木構造の耐久性や経済性の宣伝によって、ドイツ国内の林業や木材産業の普及を目指していた。また、古い街の景観を意識的に伝統と結びつけ再建するといった、プロパガンダ的な意味も含んでいた。そして、今日の木造技術の最先端をみせることで、木構造が経済的な住宅建設に最適であることを示そうとしたのであった。

一方で、ヴァイセンホーフでの新建築材料と、陸屋根といった形態に異論を唱えたD.Bは、ナウムブルクの保守的建築思想をもとに団結し、19世紀初頭のドイツの伝統的な住宅への回帰を求めていたのであった。シュトゥットガルト市は、高台に位置する133エーカーの建築用地を、ドイツ木材協会に安価かつ有利な支払い条件で提供するなど、援助の体制が存在していたことがうかがえる。

ドイツ木材協会の木材の普及と宣伝といった目的が、D.Bの伝統的な住宅への回帰的建築思想と結びつき、それにシュトゥットガルト市が援助したことで、展覧会開催に至ったとされる。

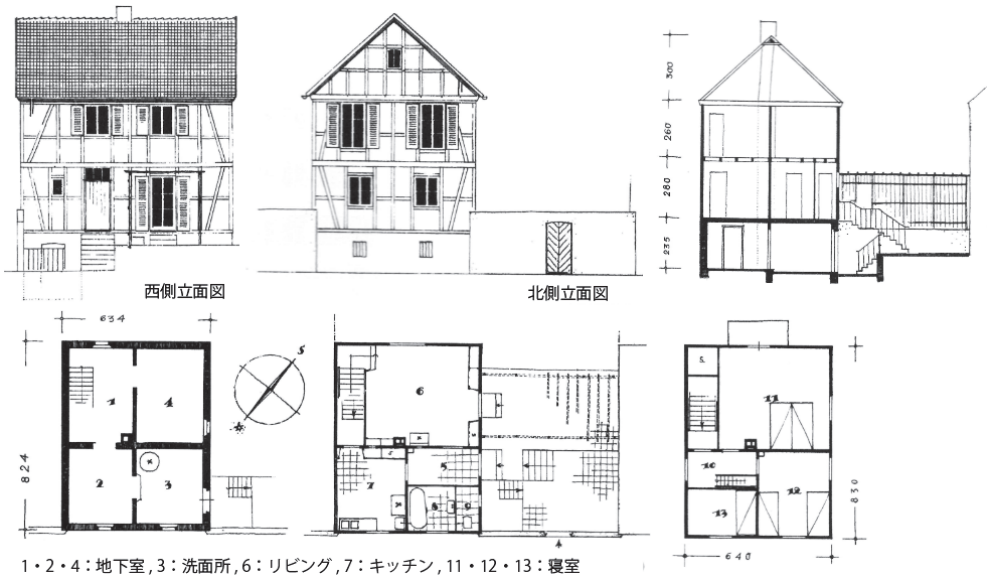
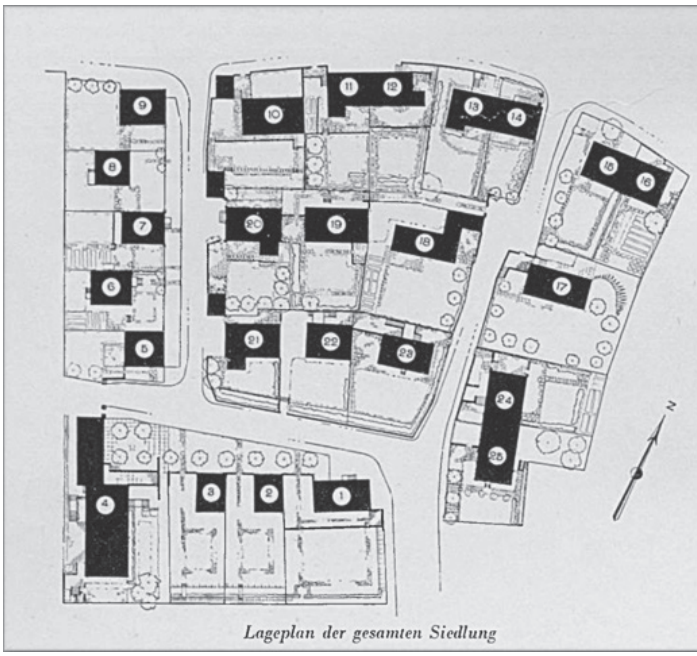


図5　Type.3パウル・シュミットヘンナー　各階平面図・立面図・断面図

図6　Kochenhof Siedlung



タイプ	建築家
1	P.Schmitthenner
2	P.Schmitthenner
3	P.Schmitthenner
4	P.Bonatz und Scholer
5	G.Schwaderer
6	P.Heim
7	Kluftinger und Gabler.
8	H.Volkart.
9	G.Graubner.
10	R.Weber
11	E.Kiemle und P.Weber.
12	H.Eitel.
13	A.Kicherer.
14	E.Kruger.
15	O.Kobele.
16	Eisenlohr und Pfennig.
17	H.Weber.
18	W.Korle.
19	E.Wagner.
20	E.Leistner.
21	W.Pilzecker.
22	H.Mayer.
23	E.Rommel und E.Wiemken.
24	W.Tiedie.
25	K.Gonser.

図 7　Kochenhof Siedlung 配置図

(4)　住宅展の概要

全体計画を担ったシュミットヘンナーを中心に、23 人の建築家によって 25 戸の住宅が建設された(表 3)。建築家は、建物の配置や内装、庭に関して、また個々の所有者による異なる希望をすべて考慮する必要があった。併せて、個々の施主の経済的利益を考慮する必要があったとされる。コッヘンホーフには、住宅建設に関する制約として示された前提条件は以下の 3 点であった。

① 木造であること
② 切妻屋根を冠すること
③ 瓦礫の外壁には漆喰で覆う、または塗装すること

木造に関して、シュミュットヘンナーは、技術的観点より、保温性に優れ、安価かつ迅速に建設できるものとして木材の有効性を主張したのであった。また、木造の骨組みは経済的な住宅建設に適するとした上で、メリットとして以下の 3 点を挙げている。(82)

① 木造の骨組みは最も軽い構造であり、最小の壁厚で最大の保温性を備える
② 住宅用外壁としては最も安価である
③ 木造の骨組みは、部分的または全体的な乾式壁を使用することで、最も広範な冬期作業を可能にする

また、勾配屋根を冠することに関しては、35° 未満の勾配は排除するようにといった詳細な制約が設けられており、(83) 急勾配の屋根が重要な要素であったことが推測される。また、そういった急勾配の屋根を冠することのメリットとして、以下の点を挙げている。(84)

① 雨水の侵入と雨水の排水が容易である
② 優れた保温性と低音伝導性を備えた補強パネルとなる天井が形成できる
③ 防音、結露防止、延焼防止、乾腐病、害虫、ペストなどの予防に有効

木造と勾配屋根を主張したシュミュットヘンナーの全体計画は、木造建築技術のさらなる開発は、伝統的な経験に基づく必要があることを強調し、木材産業の宣伝を前提とした上で、技術的観点より

表3　コッヘンホーフ・ジードルンク概要　ここに記載されている建設の合計には、備品、庭園、建築家の費用、建設管理を含む建設費が含まれるが、土地の価格と近隣の費用は含まれない。

タイプ	建築家	当時の役職	建築面積(㎡)	建設費(RM)	構造
1	Professor Dr. Paul Schmitthenner(ポール・シュミットヘンナー)	シュトゥットガルト工科大学教授	85	21850	Alter Fachwerkbau(半木造)
2	Professor Dr. Paul Schmitthenner(ポール・シュミットヘンナー)		53.1	13650	Alter Fachwerkbau(半木造)
3	Professor Dr. Paul Schmitthenner(ポール・シュミットヘンナー)		53.1	15350	Alter Fachwerkbau(半木造)
4	Professor Dr. Paul Bonatz & F.E. Scholer(ポール・ボナッツ&フリードリッヒ・ユーゲン・ショラー)	シュトゥットガルト工科大学教授・ボナッツ設計事務所員	270	101840	Skelettbau (スケルトン構造)
5	Dr.-Ing Ernst Schwaderer(エルンスト・シュウェーダー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	63.08	14300	Alter Fachwerkbau(半木造)
6	Reg-Baum Paul Heim(ポール・ハイム)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト建築専門学校卒)	67.5	15500	Alter Fachwerkbau(半木造)
7	Reg- Baum Hermann Gabler(ヘルマン・ゲーブラー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	68.4	14900	Alter Fachwerkbau(半木造)
8	Reg-Baum Hans Volkart(ハンス・フォルカート)	シュトゥットガルト工科大学教授	57.15	13400	Tafelbau(パネル構造)
9	Reg-Baum Gerhard Graubner(ゲルハルト・グラブナー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	95.4	18000	Alter Fachwerkbau(半木造)
10	Dipl-Ing Richard Weber(リチャード・ウェーバー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	107	21000	Skelettbau (スケルトン構造)
11	Dipl-Ing E. Kiemle & P. Weber(キエムレ&ウェーバー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	71	19000	Alter Fachwerkbau(半木造)
12	Dipl-Ing Albert Eitel & Hans Eitel(アルバート・アイテル&ハンス・アイテル)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	74	20000	Alter Fachwerkbau(半木造)
13	Reg.-Baum Alfred Kicherer(アルフレッド・キシェラー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	82	23500	Blockbau(ブロック構造)
14	Dr.-Ing Eduard Krüger(エドゥアルト・クリューガー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	76	15000	Blockbau(ブロック構造)
15	Dipl-Ing Otto Köbele(オットー・コブレ)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	78.4	20000	Alter Fachwerkbau(半木造)
16	Reg.-Baum Eisenlohr & Pfennig(アイゼンローア&プフェニヒ)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	71.2	16000	Alter Fachwerkbau(半木造)
17	Hellmut Weber(ヘルムート・ウェーバー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	116	17400	Alter Fachwerkbau(半木造)
18	Professor W.Körte(ウェルター・ケルト)	シュトゥットガルト工科大学准教授	115	23590	Tafelbau(パネル構造)
19	Professor Ernst Wagner(エルンスト・ワグナー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	99	19000	Blockbau(ブロック構造)
20	Ernst Leistner(エルンスト・ライスナー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	100	24000	Tafelbau(パネル構造)
21	Reg-Baum W. Panther(ヴェルナー・ピルゼッカー)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	90	23000	Alter Fachwerkbau(半木造)
22	Reg-Baum Hans Mayer(ハンス・マイヤー)	シュミットヘンナーの助手(シュトゥットガルト工科大卒)	70	16160	Alter Fachwerkbau(半木造)
23	Dipl-Ing Erhard Rommel & Erich Wiemken(エルヴィン・ロンメル&エリック・ウィムケン)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	85	19200	Alter Fachwerkbau(半木造)
24	Professor Wilhelm Tiedje(ヴィルヘルム・ティエジェ)	シュトゥットガルトの建築家(シュトゥットガルト工科大卒)	98	28500	Alter Fachwerkbau(半木造)
25	Reg-Baum Karl Gonser(カール・ゴンサー)	シュトゥットガルト工科大 都市計画家ハインツ・ヴェッツェルの助手	98	22700	Alter Fachwerkbau(半木造)

そのメリットを主張したのであった。

コッヘンホーフでの25の木造住居は、その規模より以下の3タイプに分類できる（図7）。

① 一戸建て16軒（Type. 1，2，3，5，6，7，8，9，10，17，18，19，20，21，22，23）
② 二連戸住居8軒（Type. 11/12，13/14，15/16，24/25）
③ 集合アパート1軒（Type. 4）
全てのタイプに地下室があり、電気、ガス、上下水道も完備されている。併せて、建設構造についても、大きく以下の4タイプに分けられ、更に7タイプに細分化できる（表4）。

表4　コッヘンホーフ・ジードルンク　構造

①	Alter Fachwerkbau(半木造)	①-A	Älteres system(旧式)
		①-B	Verbessertes System(改良型)
		①-C	Kombiniertes system(複合型)
②	Blockbau(ブロック構造)	②-A	Stehender Blockbau(垂直ブロック工法)
		②-B	Liegender BlockBau(水平ブロック工法)
③	Tafelbau(パネル構造)		
④	Skelettbau (スケルトン構造)		

これは1933年5月に展覧会が計画され、同年9月に開会されたことからも推測されるように、短期間での建設が想定され、そのために迅速かつ合理的建設方法として模索されていたことが考えられる（表5）。

そういった合理的建設方法の顕著なものとして、シュミットヘンナーが手掛けた作品が考えられる（Type. 1，2，3）。シュミットヘンナーは1927年時には木造建設における合理的建設方法を提示している。伝統的な住宅の建設は、工事価格が高いと非難されることに対して、新しく工業化された工法によって、経済的正当化を示したものであった。それはFAFA工法（FABRIZIERTES FACH-WERK SYSTEM）（以下、FAFA工法）といったハーフティンバーであった。これは、アメリカのバルーン・フレーム工法に類似した壁式工法であり、標準化による大量生産と部材の軽量化、建設時

表5　コッヘンホーフ・ジードルンク　スケジュール

1933年5月4日	準備作業開始。開発計画作成。
1933年5月10日	設計者を募集する最初の公聴会
1933年5月20日	提出されたデザインに基づいた建築委員会による建築家の選定
1933年5月29日	建築委員会への提出計画の提出
1933年6月6日	建築委員会による計画の承認
1933年6月9日	建設警察による計画の承認
1933年6月26日	起工式
1933年7月3日	道路工事
1933年7月13日	住宅完成
1933年9月23日	展示会開催

間の短縮を可能としている。もっとも、「保護用の外部漆喰を除いて、建物が乾燥している[85]」と述べるように、グロピウスが新しい合理的工法として、工場生産によって労働量を抑えながら天候や季節に左右されることなく生産できると提言したこと「Trocken Montage bau［トロッケン・モンタージュ・バウ（乾式組立構造）］」とも類似している。グロピウスを始めとするモダニストが、ヴァイセンホーフ（1927）やフランクフルト・アム・マインでのジードルンク（1925-1930）において、住宅建設の合理化のために、鋼や鉄筋コンクリートによって合理的工法を実験していたものに対して、シュミットヘンナーは木材による合理的工法を実験したのであった（図4）。

そして、ヴァイセンホーフに対抗するための意識的なデモンストレーションとして、わずか数百メートル先に、陸屋根を冠する制約が設けられた住宅地としてコッヘンホーフを建設したと考えられる。

Ⅵ　ナチス政権獲得以降（1933-）の陸屋根の収束

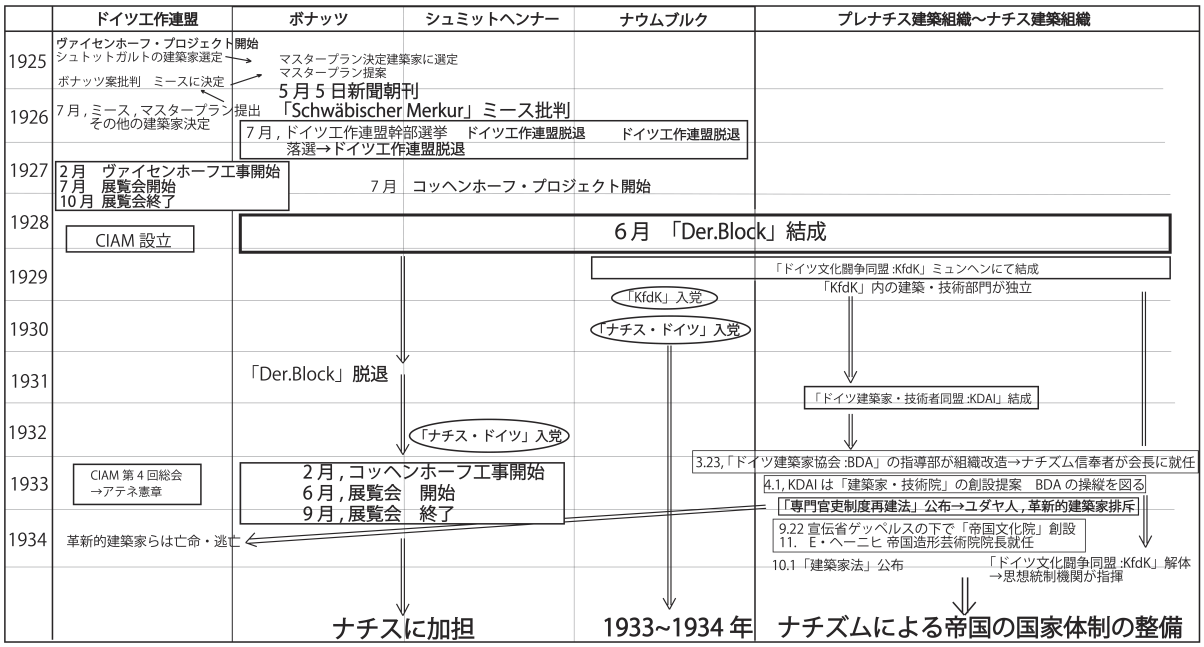
(1)「Der. Block」以降の保守的建築家の活動

D.B設立に関して、ボナッツをはじめ1933年の分譲住宅展コッヘンホーフの全体計画を担当した、シュミュットヘンナーなどがD.W.Bを去り、D.Bに参加した。D.Bは、建築雑誌【DIE BAUKUNST】の1928年5月号[86]にD.Bのマニフェストと目標を掲載した。そこでは、「このブロックには、文化の概念につながりを感じ、作品の中でこれを表現している多くのドイツ人建築家が集まっています。（中略）彼らは、新しい素材や仕事の形態に関連するすべての提案や可能性に注意を払いながら従いますが、受け継いだものを無視したり、すでに習得したものを失ったりすることはありません。[87]」と述べた。ナウムブルクの19世紀初頭の建築を理想とした「回帰的建築思想」に代表されるように、ドイツの郷土や文化の保護、形態として陸屋根を否定し勾配屋根を冠する土着的な建築を美徳として団結していたのであった。

(2)　1928年以降の「D.B」

上記のマニフェストには、同雑誌の編集者であるルドルフ・フィスター[88]により、以下の註釈がつけられている。「マニフェストに署名されている人物らは、良い意味で共鳴していますが、彼らの中で、本当に共通の方向性を見つけるとは想像しがたいです。おそらく「文化の概念」における内部の

表 6　1925～1934 年の建築組織図



相違は、大きすぎるでしょう。[89]」フィスターの指摘に呼応するように、D.B は短命であり、翌年にはプレ・ナチス的建築家集団としてナチスに吸収されていく。なかでも、ナウムブルクの 1930 年のナチス入党により、ナチスに吸収されていくこととなったのであった（表 6）。

1933 年はナチス政権の成立という政治的な背景があり、ナチスはバウハウスを始めとしたワイマール政権期の左翼的な住宅政策があったうえで執り行われ、かつ反左翼的・反モダニズム的なイデオロギー像を定着しなければならなかった。ワイマール期の国家支援の陸屋根を冠したジードルンク建設を否定し、勾配屋根の民族主義的な形態をとることは、リヒャルト・ヴァルタ・ダレー［Richard Walther Oskar Darré：1895-1953］[90] の 1929 年の著書『北方民族の生命の源としての農民階級［Das Bauerntum als Lebensquell der Nordischen Rasse］[91]』に代表されるように、郷土への回帰により反都市的、民族主義的イデオロギーを展開するナチスの根幹原理、またそれらがナチスとナウムブルクの共通した人種論が絡み合うことで、よりナチズムに基づいた強固なものになったとされる。

また、1930 年に政権獲得をしたナチスの喫緊の問題は、第一次世界大戦敗北と前年の世界恐慌に対する経済対策であり、なかでも雇用創出と住宅不足であった。そのうえで、従来より一般的であった木造且つ勾配屋根を用いた住宅を建設することは、雇用創出と住宅の大量生産が可能といった利点があった。そういったイデオロギーの側面からだけでなく、経済的な面からも勾配屋根を推進していくのであった。

この年には「近代建築の指導者の間でも表現主義的・有機的建築が評価されなくなり、その初期のエネルギーを失ってしまう[92]」とあるよう、バウハウスと D.R は 1933 年に解散してしまう。また、1920 年代終わりにはいくつかの反モダニズム組織が現れ出し[93]、それらのいくつかはナチズムと密接な関係により吸収されていく事となる。それによりナウムブルクのような郷土保護派は前面から交代を余儀なくされたと考えられる。こうした住宅における様式論争は、グロピウスとナウムブルクの屋根論争の例でも観察されるように、人種論と密接に関わって展開されていった。そして、1933 年を境に収束に向かったと考えられる。

(3) D.W.Bのポスト・ヴァイセンホーフジードルンク

1927年にD.W.Bによって開催されたヴァイセンホーフのプロジェクトに対して、D.W.B創設者の一人であるヘルマン・ムテジウス[94]［Hermann Muthesius：1861-1927］（以下、ムテジウス）は、同年死去するが、その遺稿となったヴァイセンホーフ展評にて「形態を超越する必要が説かれていない」と批判した[95]。そこでは、「陸屋根、水平連続窓などはすべて、合理化とも、経済性とも、そして構造上の必要性とも、なにひとつ関係がない。（中略）一般に新しい建築家たちの外的な造形上のモティーフについてのこだわりは、過去の様式建築家たちと同じである[96]。」と述べるように、近代建築が形態の革新の問題ではないと主張したのであった。そして、このムテジウスの遺稿に呼応するように、D.W.Bはこの後各地で同様なジードルンク展を開催し、外観上はヴァイセンホーフに類似した陸屋根を冠するジードルンクを展開する一方、各地の自然や風土に対して、科学的見地より、それぞれの生活に適応したジードルンクを展開していったとされる。

1929年に、ブレスラウ（現ポーランド：ヴロツワフ）でもD.W.Bシレジア支部の企画によって「住居と労働空間展」と陸屋根を冠したジードルンクが建設された。D.W.Bの機関紙である『DIE FORM 1929 HEFT. 17[97]』では、「1927年にシュトゥットガルトで開催された住宅展（ヴァイセンホーフ）は、ヨーロッパの建築家による建物を通じて、新しい住宅に関連する問題について本展覧会の模範的展覧会であった。（中略）ヴロツワフ展は地元の特徴、何より地域の重要性がある。地元の特徴に重点を置き、ヴロツワフまたはヴロツワフを拠点とする建築家を採用する。」と述べられている[98]。コッヘンホーフでは、ナショナリズムの観点により地元の建築家らによって執り行われていたが、ブレスラウにおいては、あくまでもD.W.Bによる「地域の特徴の理解」に適する観点より、国内の建築家のみの参画であったことがうかがえる[99]。

Berliner Tageblatt

Die letzten Worte eines Meisters.

Die neue Bauweise.

Die neue Bauweise(新しい建築法)
von Hermann Muthesius

図8　ある巨匠の最後の言葉「新しい建築法」ヘルマン・ムテジウス 1927.10.29 図内の日本語は筆者記入

また、同1929年には、グロピウスやオットー・ヘスラー[100]【Otto Haesler：1880-1962】が参加して、ドイツ南西部の都市カールスルーエで「ダーメルシュトック住宅展」が開催された。ここでの最大の特徴は、平行配置型（Zeilenbau：ツァイレンバウ）の集合住宅の建設と、「キャビンシステム」といわれる平面形式であった。幹線道路沿いに配置された中層棟と列状の低層棟の住宅団地で、住戸平面の近代化、専用浴室の完備、集中暖房、共同洗濯室の設置を実現した住宅であったとされる[101]。

さらに各国工作連盟も中欧各都市でジードルンクの建設計画を推進し、その多くはヴァイセンホーフと同様、展覧会にあわせて一般公開された。1920年代以降、多くのジードルンクと展覧会とが相次ぎ[102]、住宅建築やデザインの地平を広げることになる。

こういった各都市での工作連盟による展覧会及びジードルンクによって、形態の問題では包容できない近代建築の可能性が模索されていったと考えられる。

(4) D. W. B による建築理論としての気候風土に対する科学性

ワイマール期のドイツでは、第一次世界大戦の敗北による住宅不足と、低所得者の為の住宅供給が問題であった。そこでは、建設費と光熱費を抑えることが画策され、光熱費の削減策として、断熱や採光への配慮、そして衛生環境の改善として、通風・換気が注目されていた。

1932 年にフーゴ・ヘーリング[103]（Hugo Häring：1882-1958）の設計で、ウィーンの工作連盟ジードルンクが建設された（図 9）。これは住宅内に太陽光を取り入れることを重視したもので、平家建ての長方形平面の長辺を、ほぼ真南に向け、その外壁の 2/3 をガラス面としている。これは単に採光を採り入れるためだけではなく、紫外線による室内の消毒をするといった衛生学からの配慮も期待されていた。また、屋根は南から北にかけての片流れ屋根であり、南側天井端部には重量換気のためのスリットが設けられるなど、住宅において採光のみならず、衛生学からの科学的かつ合理的なアプローチがうかがえる。

図 9　H・ヘーリング 設計　平家建の住宅（1932）

また、ベルリン都市計画部局長マルティン・ワグナー（Martin Wagner：1885-1957）の『成長する家』[104]（1931）では、「新しい住み方」として、今まで以上に人は、日光・空気・自然へと向かっていくと、屋外環境の重要性を説いている。こういった著書での主張からもうかがえるよう、気候風土に対して、科学的かつ合理的に対処することを目指していたと考えられる。

(5) モダニストによる第 2 回 CIAM（1929）での科学的見地

D. W. B による、ドイツでみられる気候風土に対する科学的見地からの合理的対処は、規模を広げ、CIAM（近代建築国際会議）においても議論されることとなった。

第 2 回 CIAM（1929）の第 2 回会議報告には、ヴァルター・シュヴァーゲンシャイト【Walter Schwagenscheidt：1886-1968】によって『太陽軌道に対する諸空間の配置のための図』[105]（図 10）が掲載された。それは、食事室・朝食室、寝室、子ども室は東向き、女中室は西向き、居間は南〜西向きに配置すべきと示している。当時、集合住宅が一般的に、南北に細長く建物を配置し、東西から採光の確保ができれば良いと扱われていたのに対して、太陽との関係より合理的に室を配置・決定させることは、極めて近代的であったと考えられる。

また、第 2・3 回 CIAM では、住宅の高層化の是非が問われ始めていた[106]。グロピウスは 1930 年第 3 回 CIAM で、講演の主題となる「低層建築か、中層建築か、それとも高層建築か」についての問題を、第 2 回 CIAM（1929）で議論していた。これらの講演ではいずれも住居の高さに関するものであった。

グロピウスは高層住宅による集団組織の形成によって、社会全体の生産性の向上といった社会主義的なイデオロギーの下、高層住宅を主張した。これに対して、ヘーリングらは反論を唱え、階段の無い無階段住宅が理想の居住形式であり、低層建築による採光や通風の獲得や庭の有無といった衛生的観点から低層住宅を主張した。

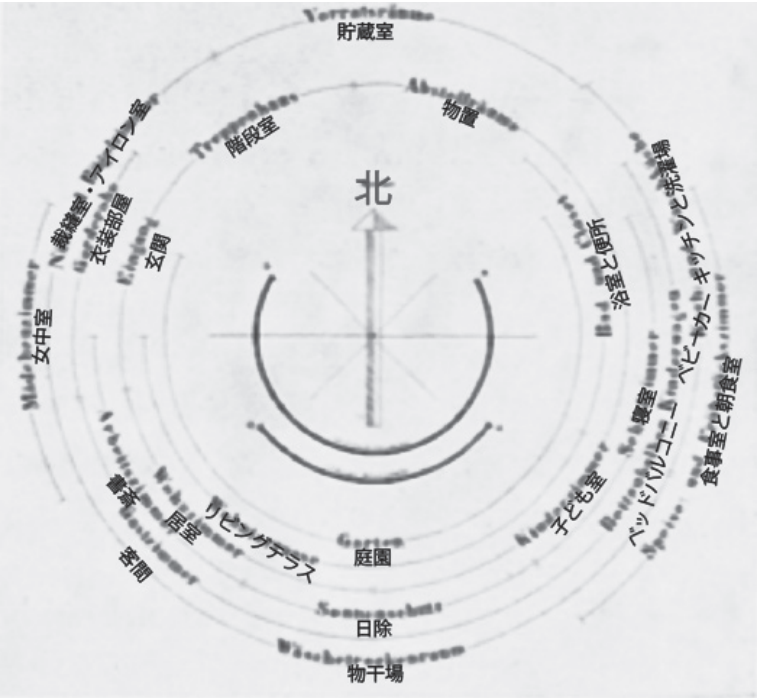


図 10　W. シュヴァーゲンシャイト『太陽軌道に対する諸空間の配置のための図』（1929）図内の日本語は筆者記入

まとめ

本稿は 1920 年代を中心に、ドイツ工作連盟を始めとするモダニストたちによる陸屋根の優位性についての主張及びその建築作品としての展開と、ドイツ郷土保護連盟のパウル・シュルツェ＝ナウムブルクを始めとする郷土保護主義者による勾配屋根の優位性についての主張及び建築作品としての展開を分析し、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての近代ドイツで繰り広げられた「屋根論争」についての経緯を明らかにした。

世紀末のドイツではドイツ帝国統一以降急速に都市化・工業化が進み、20 世紀になるとまずドイツ郷土保護運動といった自然保護運動が起きていた。それはナウムブルクといった民族主義的な建築家らの主張と不可分に結びついており、ドイツの消失した郷土を取り戻すべく勾配屋根への回帰といった形で展開されていった。一方、世紀末のシカゴでの影響を受けながらヨーロッパにもたらされた陸屋根のムーブメントは、そういった民族主義的な団体や市民層から速やかに理解されなかったものの 1927 年の「ヴァイセンホーフ・ジードルンク」によって広く浸透した。こういった運動はワイマールやシュトゥットガルトといった地方都市だけではなく、ベルリンといったドイツを代表する大都市にもみられる動きであった。このヴァイセンホーフ以降、陸屋根を支持するモダニスト達は技術性を正当化しながら主張していく。一方、伝統主義者は人種論を引き合いに陸屋根を批判し、1933 年にはヴァイセンホーフに対抗する形でわずか数百メートル横に「コッヘンホーフ・ジードルンク」を建設し、木造及び勾配屋根の優位性を主張していく。1933 年のナチスによる政権獲得以降、反都市的、民族主義的イデオロギーを展開するナチスの建築思想は、人種論が絡み合うことでよりナチズムに基づいた強固なものになったとされ、それは、伝統的な勾配屋根に回帰することで何とかとりつくろわれたと推測される。しかしながら、1920 年代後半より人種主義論を元に活動していたナウムブ

ルクはナチス政権下においても同様な主張をする一方、伝統的なものとして勾配屋根を最重要視しながら、屋根論争が収束する1933年以降にはドイツの手工業や職人の再評価を主張しており、これは19世紀末からの生活改革運動やドイツ郷土保護連盟での活動からもみられるように彼の根幹原理であったことが窺えた。

19世紀末のドイツをはじめとするヨーロッパでは近代国家形成の中で国家的なナショナリズムの高揚が建築史背景に存在している。それまで普遍的で地域的な象徴として建築表現の上で扱われていた陸屋根の是非が、国家の保守派と改革派の間の政治的な分裂の表れとして、左翼または共産主義的でリベラルな現代建築運動としての陸屋根と、右翼または国家主義的な勾配屋根といった政治的な意味も含んだものとなり、更には人種的な意味合いを含んだものとしても解釈されていくこととなる。

このように、近代ドイツでみられる「屋根論争」は誌面を賑わせただけではなく実際の建築物においても対立概念として確認され、1933年のナチス政権獲得によりナチスによる陸屋根の否定（同一化）により収束に向かうが、近代建築の形成過程において重要な形態論争の一つであったと考えられ、それは、両派の間で止揚され、近代ドイツのモダニズム建築形成へ多大な影響を与えたと考えられた。

註釈

（1） Julius Posener『Paul Schultze-Naumburg：Maler、Publizist、Architekt1869-1949』1989 R. Bacht.

（2） Paul Schultze = Naumburg『Kunst und Rasse：(芸術と人種)』Munchen Lehmanns 1928

（3） 前掲書（1）に同じ

（4） Kai K. Gutschow「SCHULTZE-NAUMBRUG'S HEIMATSTIL：A NATIONALIST CONFLICT OF TRADITION AND MODERNITY」1992 University of California、Berkely U.S.A などが挙げられる。

（5） Miller Lane Barbara『Architecture and politics in Germany 1918-1945』1968 Harvard University Press

（6） 中江研「ヴィルヘルム・リュッベルトによる低層住宅の経済的優位性の主張とその論拠について：ヴァイマール期ドイツの高層住宅―低層住宅論争　その1」『日本建築学会計画系論文集』78（691）2013 p. 2067 などが挙げられる。

（7） 中江研・山本一貴「W. グロピウスとP. シュルツェ＝ナウムブルクとの屋根論争について」『日本建築学会大会学術講演会集（中国)』2008年 pp. 621-622 において中江氏が「近代建築の重要な形態言語に関して註目すべき議論の一つとして、1920年代のドイツにおいて繰り広げられた『屋根論争』はよく知られている。」と指摘するように近代建築史においては通史的な扱われ方であるといえる。

（8） 本稿では、W. グロピウスを代表とし、1925『Die Bauwelt』に「陸屋根支持論」を寄せたル・コルビュジエといった一般的に「モダニスト」として扱われる人物を指す。

（9） 本稿では、P. ナウムブルクを代表とし、保守的建築家集団「Der. Block」のメンバーであるパウル・ボナッツといった一般的に「ナショナリスト」として扱われる人物を指す。

（10） Miller Lane Barbara『Architecture and politics in Germany 1918-1945』1968 Harvard University Press、『Paul Schultze = Naumbrug 1869-1949：Maler・Publizist・Architekt』1989 Richard Gmbh Norbert Borrmann

（11） 中江研・山本一貴「W. グロピウスとP. シュルツェ＝ナウムブルクとの屋根論争について」『日本建築学会大会学術講演会集（中国）2008』pp. 621-622

（12） Walter Gropius「Das flache Dach Internationale Umflage uber die technische Durchfuhrbarkeit horizontal abgedeckter Dacher und Balkone」『Die Bauwelt』1926 Heft. 8 pp. 162-168, Heft. 9 pp. 223-227、

Heft. 14 pp. 322-324. Heft. 16 pp. 361-362

(13) Paul Schultze-Naumburg『Flaches oder geneigtes Dach?（陸屋根か勾配屋根か？）』1927

(14) Paul Schultze = Naumburg『ABC des Bauens（建築の ABC）』1928

(15) 前掲書（1）に同じ。

(16) 桂修治「創始期の郷土保護論：エルンスト・ルードルフにおける「郷土保護」の立場」徳島大学『言語文化研究』2012 p. 56 より引用。

(17) 前掲書（16）に同じ。p. 57 より引用。

(18) 前掲書（16）に同じ。P. 57 より引用。

(19) 長谷川章『芸術と民族主義：ドイツ・モダニズムの源流』ブリュッケ 2008 p. 43

(20) 赤坂信「ドイツにおける 19 世紀後半の国土美化の衰退と郷土保護運動の影響」『造園雑誌』50（5）1987 p. 57

(21) Lara Elisabeth Day「Paul Schultze-Naumburg：An intellectual biography」2014 p. 69 より引用。

(22) 前掲書（16）に同じ。

(23) 前掲書（16）に同じ。p. 56 より引用。

(24) Paul Schultze = Naumburg『Kulturarbeiten Band1』HAUSBAU EINFUHRENDE GEDANKEN ZU DEN 1901

(25) 前掲書（16）に同じ。

(26) 前掲書（16）に同じ。

(27) 前掲書（16）に同じ。p. 57 より引用。

(28) Hans Kornfeld『50 Jahre Deutscher Heimatbund：Deutscher Bund Heimatschutz』1954 Neuss am Rhein p. 23 より引用。

(29) 1907 年 6 月 15 日に施行された法律。郷土と伝統に即した街並みを美観とし、実現保護させるために、地域の通りや広場を保護する法律。

(30) 前掲書（20）に同じ。p. 227 より引用。

(31) Klaus Sedlbauer、Eberhard Schunck、rainer Barthel、Hartwig M. Kunzel『Flat Roof Construction Manual：Materials、Design、Applications』Birkhauser Architecture 2010 p. 14

(32) 動植物繊維を原料とするフェルトに、ストレートアスファルトをかけ、両面をブローンアスファルトで被覆し、表面に粘質防止剤を散布したもの。またそれを用いた屋根。富塚信司・森安四郎・五十嵐永吉『図説建築用語事典』実教出版 1981 参照。

(33)『Ausgefuhrte Bauten und Entwurfe von Frank Lloyd Wright［フランクロイドライト建築図面集］』Ernst Wasmuth 1910

(34) 八束はじめ・小山明『未完の帝国ナチス・ドイツの建築と都市』福武書店 1991 p. 250

(35) アドルフ・マイヤー著、貞包博幸訳『バウハウス叢書 3 バウハウスの実験住宅』中央公論美術出版 1991 p. 16

(36) 前掲書（12）に同じ。

(37) Kai K. Gutschow「SCHULTZE-NAUMBRUG' S HEIMATSTIL：A NATIONALIST CONFLICT OF TRADITION AND MODERNITY」1992 University of California、Berkely U.S.A p. 16

(38) ベルリンを中心に第一次世界大戦前の数年間に住宅改革に尽力した建築家の一人。『TRES ARQUITECTOS DEL PERIODO GUILLERMINO HERMANN MUTHESIUS/PAUL SCHULTZE-NAUMBURG/PAUL MEBES』UNIVERSIDAD DE VALLADOLID』2006 を参照。

(39) Paul Mebes『Um 1800：Architektur und Handwerk im letzten Jahrhundert ihrer traditionellen Entwicklung』F. Bruckmann A. G. 1908

(40) 建築家・建築理論家。ダンチヒ及びカールスルーエ工科大学教授。著書『Saches Bücher vom Bauen』（1914-1920）、『Deutsche Baukunst im Mittelalter』（1922）、ヴィットリオ M. ラムプニャーニ著、川向正人

訳『現代建築の潮流』鹿島出版会 1985 参照。

(41) Friedrich Ostendorf『Sechs Bücher vom Bauen』(1914-1920)

(42) オーストリアの建築家。ウィーンとベルリンで建築を学ぶ。とりわけウィーン美術アカデミーではアウグスト・フォン・ジッカースブルクから効用性について、エドゥアルト・ファン・デル・ニュルからは繊細製図画法を学んだ。1894 年、ウィーン美術アカデミーの教授に就任「実用的でないものは美しくない」と演説した。ケネス・フランプトン著、中村敏男訳『現代建築史』青土社 2003 参照。

(43) ドイツの政治家、プロテスタント神学者。ドイツ第二帝政期においてリベラル派を代表する政治家、言論人として、政界・メディアなどで活躍した。

(44) Friedrich Naumann『Austellungsbriefe』Berlin、1909、p. 32、review of tie Berlin Gewerbeaustellung of 1896 "Neben dem Eisen ist es Dachpappe Holzzement wodurch die Gestaltung der Gebäude im Ausseren ganze verschoben wird. Holzzement gestaltet flachere und ganze flache Dächer：Iässt uns also italienischen Baufoemen näher kommen also es bei Ziegel (steiles Dach) und Schiefer (halbsteiles Dach) möglich war."

(フリードリヒ・ナウマン『展示会の手紙』ベルリン 1909 年 p. 32、1896 年のベルリン見本市のレビュー：「鉄に加えて、屋根用フェルト、木材セメントがあり、建物の外側のデザインを完全に変えます。木材セメントは、より平らで完全に平らな屋根を作ります。イタリアの建物の形に近づけることができます。レンガ(急勾配の屋根)とスレート(半勾配の屋根)で可能でした。」)

(45) ドイツの建築家、哲学者、建築士、作家、芸術科学者、ベルリン工科大学の教授、私立評議員。

(46) テオドール・ゲック〔Theodor Goecke：1850-1919〕ドイツの建築家、都市計画家、プロイセンの建築関係者、記念碑の保存管理者。

(47) ドイツの建築家、建築職人。大学教授やドレスデンの議員としても活動。

(48) スウェーデン建築家であり、20 世紀初頭のベルリンの地下鉄 U バーン建設家として活躍。

(49) 建築家。画家ユーゲント・シュティルや表現主義とも関わりをもちながら古典主義的感覚をベースとする近代的スタイルを開拓する。特に AEG の一連の仕事は名高い。八束はじめ・小山明『未完の帝国ナチス・ドイツの建築と都市』福武書店 1991 参照。

(50) Friedrich Seeßelberg「Dasflache Dach」『Kunstwart』1912 p. 507

(51) Ferdinand Avenarius「Der Werkdandi bund」『Kunstwart』1912 pp. 424-426

(52) Walther Scheidig『Die Bauhaus Siedlungs-Genossenschaft in Weimar 1919-1925』p. 257

(53) Walter Gropius、Paul Schultze-Naumburg「Wer hat Recht? Traditionelle Baukunst oder Bauen in neuen Formen〔誰が正しい？　伝統的な建築または新しい形の建物〕」『UHU』Ullstein Verlag 1925

(54) 前掲書(12)に同じ。

(55) 『Die Bauwelt』1926 Heft. 8 において、ドイツ国内から 6 件(エーリッヒ・メンデルゾーン、タウト兄弟、ルートヴィヒ・ヒルバースアイマー、リヒャルト・デッカー、オットー・ヘスラー、アドルフ・グスタクシュネッグ)、Heft. 9 において、オーストリアから 2 件(ペーター・ベーレンス、ヨーゼフ・ホフマン)、フランスから 2 件(ピエール・ジャンヌレとル・コルビュジエ)、Heft. 14 においてさらにドイツ国内から 4 件(L. プルマイスター、A. ヴァーゲンフュール、J. リングス、H. ランゲ)の回答が掲載されている。

(56) 前掲書(12)に同じ。

(57) 前掲書(12)に同じ。pp. 41-42

(58) 前掲書(12)に同じ。pp. 41-42

(59) 前掲書(8)に同じ。pp. 41-42

(60) ケネス・フランプトン著、中村敏男訳『現代建築史』青土社 2003 p. 286

(61) Peter Behrens『Bau und Wohnung〔建設とアパート〕』Deutscher Werkbund 1927 pp. 17-25

(62) Deutschnationale Volkspartei ワイマール共和政期のドイツの保守、右派政党。ドイツ国家国民党、ドイツ国枠人民党とも訳される。

(63) Wilhelm Mommsen『Deutsche Parteipro-gramme（Deutsches Handbuch der Politik 1［ドイツの政党プログラム（ドイツの政策ハンドブック 1)］』Olzog 1960 p. 533 以降。
(64) Ernst May「DAS FLACHE DACH」『Das neue Frankfurt internationale Monatsschrift für die Probleme kultureller Neugestaltung』1927. 10-1927. 12 Heft. 7
(65) 前掲書（63）に同じ。p. 150 より引用。
(66) 前掲書（13）に同じ。
(67) 前掲書（14）に同じ。p. 9 より引用。
(68) 前掲書（16）に同じ。pp. 41-42 より引用。
(69) 1926 年 5 月 5 日　朝刊「Schwäbischer Merkur」
(70) 前掲書（16）に同じ。pp. 41-42 より引用。
(71) ユリウス・ポーゼナー著、田村都志夫訳、多木浩二監修『近代建築への招待』青土社 1992 pp. 258-259
(72) ドイツの建築家。ミュンヘン工科大学でフリードリッヒ・フォン・ティールシュに就く。ヘレラウで活動。ウィーン、ベルリンの美術学校等で教える。近代運動から逸脱した伝統主義は地方性と古典主義に接続している。ケネス・フランプトン著、中村敏男訳『現代建築史』青士社 2003 参照。
(73) 前掲書（2）に同じ。
(74) Paul Schultze = Naumburg「Zur Frage des schragen un flache Daches bei urserem Wohnhausbau【私たちの家の傾斜した屋根、平らな屋根への質問について】」『DEUTSCHE BAUZEITUNG』1926 pp. 777-784
(75) 前掲書（74）に同じ。
(76) 前掲書（74）に同じ。
(77) 前掲書（74）に同じ。
(78) 前掲書（74）に同じ。
(79) シュトゥットガルトの建築家。一時はナチス政権にコミットするが、後にヒトラーと合わずにトルコに亡命。戦後帰国する。八束はじめ・小山明『未完の帝国ナチス・ドイツの建築と都市』福武書店 1991 pp. 58-59
(80) 前掲書（74）に同じ。
(81) Friedrich Seeßelberg『Das flache Dach im Heimatbilde［陸屋根の家の写真］』Weise & Co 1912 p. 20
(82)『DER BAUMEISTER 31. JAHRGANG、HEFT. 11』pp. 386-387
(83) Julius Hoffmann『DIE 25 EINFAMILIEN-HAUSER DER HOLZSIEDLUNG AM KOCHENHOF』2006 p. 3
(84) 前掲書（34）に同じ。p. 147 より引用。
(85) Wolfgang Voigt「Bau und Gegenbau—unter dem gemeinsamen Dach der Moderne?」『Moderne neu denken Architektur und Städtebau des 20. Jahrhunderts—zwischen Avantgarde und Tradition』2019 p. 131
(86)『Die Baukunst』1928. 5.
(87) 前掲書（85）に同じ。
(88) ドイツの広報担当家。建築家。1925-31 年の間は建築雑誌『DIE BAUKUNST』の編集を担当。
(89) 前掲書（85）に同じ。
(90) ドイツの思想家。アルゼンチンに生まれドイツで農業経済学を学び、農林省願となる。ナチスに接近し、「血と土」の思想を喧伝する。第二次世界大戦後、ニュルンベルク裁判に掛けられる。ケネス・フランプトン著、中村敏男訳『現代建築史』青土社 2003 参照。
(91) Richard Walther Oskar Darré『Das Bauerntum als Lebensquell der nordischen Rasse［北方民族の生命の源としての農民階級］』1929
(92) Raizman David Seth『History of Modern Design』2003 Perarson College Div pp. 184-185
(93) 宮脇檀・コンペイトウ『現代建築用語録』彰国社 1970 p. 201「Der Block」の他にも、フリッツ・ヘー

ガー率いる「WVDA：ドイツ建築・経済同盟」、エミール・ヘッグ率いる「AIV：ドイツ建築・技術者同盟」などがある。なかでも1933年1月設立の「KDAI：ドイツ建築家・技術者闘争同盟」はナチス「啓蒙宣伝省」とより密接に結びついていたとされる。

(94)　ドイツ人建築家。「ドイツ工作連盟」の創設者。イギリスから新しい動向をもち帰り、その宣伝・教育・組織に努めた。八束はじめ・小山明『未完の帝国ナチス・ドイツの建築と都市』福武書店1991参照。

(95)『ベルリン日報』512号　1927年10月29日朝刊：Berliner Tageblatt Nr. 512 29. Die Oktober 1927

(96)　前掲書（95）に同じ。

(97)『Die Form：Zeitschrift für gestaltende Arbeit』4. JAHR HEFT. 17　1. SEPTEMBER 1929

(98)　前掲書（16）に同じ。pp. 451-452より引用。

(99)　塚口眞佐子「モダンデザインの背景を探：1920年代アヴァンギャルド住宅誕生における諸事情その3 ヴァイセンホーフ・ジードルンク」『大阪樟蔭女子大学論集第47号（2010）』p. 124では、「ヴァイセンホーフ同様、外国人建築家の招聘が計画されたが、しかし、これは高まりつつあった外国人排斥の風潮の影響か、市当局の賛同が得られず、国内の建築家のみの参画となっている。」と指摘している。

(100)　ドイツの建築家。アウグスブルクとニュルンベルクの建築技術学校に学ぶ。ツェレに設計事務所を開設し、集合住宅の工業化を推進する。「Der. Ring」に参加、ナチス台頭によって引退し、定演の切開に従事した。ケネス・フランプトン著、中村敏男訳『現代建築史』青土社2003参照。

(101)　前掲書（16）に同じ。p. 124より引用。

(102)　筆者が把握している事例を挙げる。

・オーストリア工作連盟によるウィーン郊外の「ジードルンクと展覧会」（1932）

・チェコスロヴァキア工作連盟のプラハの「新しい家」展と「ババ・ジードルンク」（1932）

・スイス工作連盟によるチューリッヒの「ノイビュール・ジードルンク」（1930-32）

(103)　建築家。フィッシャーに師事。ベルリンで「11月グループ」に属して活躍し、「Der. Ring」の書記長を務めた。

自ら「新建築」と称する「有機的建築」の理念を発展させた。八束はじめ・小山明『未完の帝国ナチス・ドイツの建築と都市』福武書店1991参照。

(104)　1931年にマルティン・ワグナーらによって企画された「成長する家」と題された取り組み。中江研氏の一連の研究が詳しい。

(105)『DAS NEUE FRANKFURT』3. JHRG NOVEMBER 1929 HEFT. 11 p. 209

(106)　角田理衣・中江研・足立裕司「ヴァイマール期ドイツにおける高層住宅―低層住宅論争について」『平成22年度日本建築学会近畿支部研究発表会』p. 765では、「事の発端は1929年にW. グロピウスによるベルリンに建設されたハーゼルホルスト・ジードルンク設計競技で高層住宅案を提示したことであった。」と指摘している。

図版出典

図1）『DER BAUMEISTER 1928 Heft. 2』より引用 1927年撮影

図2）　Julius Posener『Paul Schultze-Naumburg Maler Publizist Architekt1869-1949』1989 R. Bacht. より引用

図3）「DEUTSCHE DIGITAL BIBLIOTHEK」より引用「Versuchssiedlung der GAGFAH im Fischtal-grund」1928/1929頃撮影

図4）『Schwäbisches Heimatbuch 1934』より引用　ポストカード

図5）　Deutsche Bauzeitung 65. JAHR 1931 18. FERBUAR』p. 24より引用

図6）『DER BAUMEISTER 31. JAHRGANG, HEFT. 11』p. 387より引用

図7）『DER BAUMEISTER 31. JAHRGANG, HEFT. 11』p. 388より引用

図8）「Berliner Tageblatt」Nr. 512 29. Die Oktober 1927 日本語は筆者記入

図9）『Die Form：Zeitschrift für gestaltende Arbeit』7. JAHR HEFT. 7 15. JULI 1932 p. 219より引用

図 10）『DAS NEUE FRANKFURT』3. JHRG NOVEMBER 1929 HEFT. 11 p. 209 より引用　日本語は筆者記入